

元暦の古碑と名刀工

糠田の入山という部落に「元暦年間」の古碑がある。この古碑は、県内でも数少ないものだという。しかし惜しむらくは風化激しく碑の文字が明確に読みとることができない。

ただ「小手濫觴記」によれば「元暦元年（西暦千八百八十四年頃）三月」と大きな文字のみが読みとれたということであった。

この古碑との関係については明かでないが、このようなことが語り伝えられている。

その昔、刀鍛冶がおり、この刀鍛冶の打つ太刀がまことに素晴らしいものであった。この当時刀を打つては右に出ずる者がいないといわれた名工近江国の関氏（関の孫六を打つた名工か。）をも、凌駕する程の業物を鍛ち出したという。

ある日遠くこの噂を聞いた関氏がはるばるこの地に足を入れたのである。そしてこの鍛冶の鍛えた業物を見た。その反りといい色つやといい紋様切味のよさ、一点非のうちどころのない正に名刀であり名工で、到底拙者の及ぶところでないと言賞讃をおくつたのである。

そこで関氏は「拙者（関・堰）を破れば即ち大水となる」といい、この名刀工を「大水」と名付けたということである。

この古碑は、名刀工「大水」の屋敷跡に建てられてあり、現在も跡地から時折金屑葉が発見されるといふ。しかしこの古碑と名工とのいわれについては、今もって知る由がない。